

初対面雑談会話のデータ収集の方法

—交流会型収集の事例報告—

嶋原耕一（立教大学）

Data Collection Method of First Encounters of Mundane Conversation:
a Report on Data Collection at Gatherings

Koichi SHIMAHARA (Rikkyo University)

キーワード： 初対面雑談会話，データ収集，自然なデータ，交流会型収集

Keywords： First Encounters of Mundane Conversation, Data Collection,
Natural Data, Data Collection at Gatherings

SUMMARY

The aim of this paper is to review data collection methods of first encounters of mundane conversation in previous research and report data collection at gatherings, in which the researcher believes more natural data can be collected.

1. はじめに

日本語教育研究では、これまで多くの研究が初対面会話を分析対象としてきた。例えば、初対面会話におけるスピーチレベル（嶋原 2014 など）、話題選択（関崎 2016 など）、話題転換（李 2014 など）、自己開示（全 2010 など）などが注目され、研究が蓄積されている。そのように多くの研究が蓄積されている理由の一つは、初対面会話がその後の対人関係に与える影響の大きさが、認知されているためだろう。例えば小川・吉田（2009）は、「他者と親密な関係を築くためには、関係の初期段階で会話という行為を通じて生じる印象」が重要だと記し（p.129）、初対面会話の重要性を主張している。

ただ、そのように重要性が認知され研究が蓄積されている初対面会話であるが、そのデータが不自然なものであると批判されることも多い。自然なデータをどれだけ研究者が収集できるかについては、Labov（1972）の Observer's Paradox についての議論が有名である。Labov（1972）は研究者が収集できるデータについて、以下のように述べている。

コミュニティ内の言語研究の目的は、手順を踏んで (systematically) 観察されていないときに、人々がどのように話しているのかを明らかにすることである。しかし私たちは、手順を踏んだ観察 (systematic observation) によってのみ、それらのデータを手に入れることができる。

(Labov, 1972, p.209 著者訳)

上記のようなパラドックスに直面し、録音・録画していることを話者に知らせずに、データを収集している研究もある。しかしインフォームドコンセントを得た上で、倫理的に適切な研究を行うためには、録音・録画していることを話者に知らせることが必要である。

以上のような背景の下で、本稿ではまず初対面会話の特徴を概観し (第2節)、初対面会話を分析対象とする研究がこれまでどのようにデータ収集を行ってきたのか、まとめることとする (第3節)。その上で、初対面会話を収集するための方法について、著者の実践例を一つ報告する (第4節)。また本稿では初対面会話の中でも、日常的状況における初対面雑談会話に焦点を絞ることとする。日常的状況とは何か、雑談がどのように定義されるのかについては、次節で述べたい。

2. 初対面雑談会話の特徴

一口に会話といっても、それは様々な観点から分類することができる。本節ではまず、他の会話と比較しながら初対面雑談会話の特徴を整理していきたい。

会話を分類するための観点の一つに、制度的状況 (institutional settings、Drew & Heritage, 1992) か日常的状況 (ordinary settings) か、というものがある。制度的状況の会話とは、「診療場面、法廷、教室、カウンセリング、ニュースインタビューなど、特定の制度的目的のもとに行われる相互行為」である (串田, 2010, p.222)。制度的状況が日常的状況と区別される特徴として、丹羽 (2007) は「参与者にそれぞれの役割が明確にあること、その場面で何をやるかの目的が明確であること、それらに応じて言語的振る舞いにはある特定のパターンへの期待値があること」を挙げている (p.73)。一方の日常的状況とは、制度的状況と違って、参与者の役割及び目的が明確でないような状況における会話だといえる。制度的状況を分析対象とすることが多い会話分析 (Conversation Analysis) の研究群は、制度的状況において、会話の構成や行為のシーケンスがいかにかに当該状況に影響を受けながら、同時にその状況を作り上げているのか、明らかにしている。

制度的状況と日常的状況のどちらにも、初対面会話はありえる。例えば診療場面や教室において、初めて会う医者や教師 (または学生) を相手に会話をするのであれば、それは初対面会話だといえる。対する日常的状況における初対面会話には、共通の友人に紹介された人との会話や、バーで偶然隣に座った人との会話などが、ありうるだろう。本稿では、「初対面であること」がより意識されやすいと考えられる日常的状況の初対面会話に注目し、さらにその中でも、雑談 (mundane conversation) に焦点を絞ることとする。雑談を筒井 (2012) は、「特定の達成すべき課題がない状況において、

あるいは課題があってもそれを行っていない時間において、相手と共に時を過ごす活動として行う会話」と定義している (p.33)。例えば日常的状況であっても、「友人を映画に誘う」「非礼を詫び許しを乞う」というような「特定の達成すべき課題」を話者が志向している場合、それは雑談とはいえない。それらの発話行為 (Speech Acts、依頼・謝罪・ほめ・断り・指示など) については、その部分のみの談話データが、ロールプレイや談話完成テストにより収集されることが多い。本稿では、日常的状況における初対面雑談会話に、注目する¹。

以上、制度的状況と日常的状況、及び雑談について見てきたが、会話を分類する観点としては他にも、話者間の関係性や媒体 (対面か電話か、など)、参加人数 (一対一の会話か、3人以上の話者による会話か、講演などの一対多の会話か、など)、用いられる言語 (英語会話か日本語会話か、共通語が用いられているか方言が用いられているか、など) などが挙げられる。特に話者間の関係性については、データ収集に先立ち統制され、論文内でも言及されることが多い。関係性を規定する要因は様々だが、代表的な要因は力と心的距離だろう²。力の要因としては、社会的地位 (学生、教師、医者、社会人、上司か部下か、など) や学年、年齢が挙げられる。心的距離の要因としては、初対面か友人か、同僚か組織外の知り合いか、などが挙げられる。さらに日本語教育研究及び第二言語習得研究では、話者の属性として母語話者か非母語話者かという要因が統制され、その組み合わせによって母語話者同士の母語場面 (Native Situation)、母語話者と非母語話者間の接触場面 (Contact Situation、Neustupný, 1985)、非母語話者同士の第三者言語接触場面 (third-party language contact situation、Fan, 1992) に会話が分類されることも多い。

日常的状況における初対面雑談会話の主な特徴は、話者間の心的距離が離れていることと、雑談により構成されていることだといえる。そのため、例えば話者間の心的距離により変わるとされる要素 (敬語、スピーチレベル、自己開示など) の研究や、話題の選択についての研究などに、初対面雑談会話は適していると考えられる。それでは次節で、これまでの日常的状況における初対面雑談会話を分析対象とする研究が、どのような方法を用いてデータを収集してきたのか、見ていくこととする。

3. 先行研究での収集方法と問題点

まず会話データの収集方法として、大場他 (2014) は先行研究を振り返り、以下の六つを提示している。

- ① 自然談話 (雑談・電話・インタビュー、行動調査)
- ② メディア (テレビ・漫画・小説の会話・教材のモデル会話)
- ③ 実験 (ロールプレイ・談話完成法)
- ④ コーパス (公開されたコーパスの会話)
- ⑤ 作例 (論文執筆者が内省により作成した会話)
- ⑥ 携帯メール・SNS (携帯やインターネットを媒介としたやりとり)

上記六つの内、初対面雑談会話を分析対象とする研究が主に用いるのは、①自然談話③実験④コーパスの三つである。まず④コーパスについては、代表的な日本語の会話コーパスとして、国立国語研究所による『日本語話し言葉コーパス』と、宇佐美まゆみ氏による『BTSJ による日本語話し言葉コーパス—日本語会話 1（初対面・友人、雑談・討論・誘い）』が挙げられる。前者に初対面雑談会話は含まれず、雑談としてあるのは知り合い同士の、「話題の制約なしに、10 分程度、自由に対話をおこなってもらった」という「自由対話」のみである。後者には初対面雑談会話が 55 会話含まれているが、会話の長さや話者の属性は「コーパス情報（概要及び詳細）」に記載されているものの、データ収集の方法についての記載は見当たらない。したがって、両コーパスとも具体的なデータ収集手順は不明といえる。

続いて①自然談話及び③実験の方法を用いる研究を見ていくが、それらを厳密に二つに分類することは難しい。その理由の一つは、データの収集方法を詳細に記していない研究が多いためである。例えば、初対面雑談会話におけるスピーチレベルに注目している橋本（2006）、陳（2003）、宇佐美・李（2003）は、データ収集の手順として、以下のような説明のみを記している。

橋本（2006） 会話は 15 分間行ってもらい、その会話を録音した。（p.89）

陳（2003） 二人一組で、自己紹介から始め、自由に会話をしてもらい、計 8 組 219 分の会話を収集した。（p.9）

宇佐美・李（2003） 話題は、特に与えず、自然に話すよう依頼した。（p.100）

これでは、具体的にどのような場所で話者にどのような指示を与え、どのような手順でデータ収集を行ったのかは分からない。したがって話者に「自然に話すよう」指示した結果、どのような自然なデータが収集できたのかは判断できない。

①自然談話と③実験の分類が難しい理由の二つ目は、そもそもその区別自体が非常に曖昧だからである³。例えば伊集院（2004）と猪俣（2004）は、初対面雑談会話を収集する際に、話者にどのようなことを想定して話すのか、以下のように指示を出している。

伊集院（2004） 初対面の会話相手に関しては、自分の寮やアパートで初めてあった人や、アルバイトの面接の待合室で一緒になった人など、今後も付き合いが予想される人を想定してもらった。（p.23）

猪俣（2004） 各会話は東京外国語大学院生控室において、約 15 分間録音された。被験者には、「今司会などのパーティーで隣り合った人などを想定して会話して下さい。」というインストラクションを出すなどして、なるべく自然な会話になるように努めた。（p.55）

上記の指示について、話者がどの程度それらの指示通りに、場面を想定したのかは分からない。ただ上記のような指示を与えて得られたデータは、①自然談話というよ

りも、③実験のロールプレイに近づくと考えられよう。それでは、自然な会話を収集するにはどのような方法をとればいいのか。一つには、Labov (1972) のパドックスが生じないように、データ収集をしていることを話者に知らせずに、会話を録音・録画する方法がある。例えば初対面雑談会話ではないが、Warren (2006) は公共の場所で、会話に従事している人の 1 メートル以内に近づき、何も許可を得ずに録音を実施し、録音後にそのデータを研究に使うことの承諾を得ている (p.25-26)。また日本語の初対面雑談会話の収集方法としては、西郡 (2002) が提唱する「偶然の初対面」という方法も挙げられる。それは以下のような方法である。

「音声学関係の実験があり謝礼付きで被験者を求めている。やってもらうのは、被験者二人で文章を読んでもらうことで、その音声を録音する。」と被験者を募集する。やってきた二人の被験者を座らせ、実験者は手順の説明を開始しようとするが、読んでもらう予定の文章を忘れてきたと称し、その場に二人を置き去りにする。このあと 15 分間実験者は戻って来ない。その間の二人の会話をデータにしようというものである。(西郡, 2002, p.2)

上記のように西郡 (2002) は、話者に知らせることなく、その会話の様子を録音・録画し、自然な会話を収集している。しかし Warren (2006) 及び西郡 (2002) の方法には、話者のインフォームドコンセントを得ていないという、重大な欠陥がある。インフォームドコンセントについて、社会学の調査法の教科書ともいえる Neuman (1997) は、以下のように述べている。

基本的な倫理原則は次の通りだ。誰かに参加を強制することは決してすべきでなく、全ての研究参加は自発的でなければならない。許可を得るというだけでは十分でなく、参加したら何を質問されるのか、協力者は知る必要がある。そうして初めて、情報に基づいた (参加するか否かの) 決断をすることができる。

(Neuman, 1997, p.151、著者訳)

Neuman (1997) の「何を質問されるのか」という文言はインタビュー調査を想定しているものだが、会話データの収集については、「誰と何を話すことになるのか」と言い換えることができるだろう。Warren (2006) 及び西郡 (2002) の研究は、上記の倫理原則に明らかに違反しており、繰り返されるべきではない⁴。研究者はインフォームドコンセントを得ることを前提とし、データ収集の方法を考える必要があるだろう。

初対面雑談会話以外のデータであれば、自然発生的なデータ (natural occurring data) を収集するために、個人密着法という方法が用いられることがある。例えば、国立国語研究所が 2021 年に公開を予定している『日本語日常会話コーパス』では、「性別・年代などの点からバランスを考慮して選別された調査協力者に収録機材等を一定期間貸し出し、協力者自身に会話参加者との日常会話を収録してもらう方法」である個人密着法を採用しているとのことである (田中他, 2017, p.481)。この方法には、研究者が

その場に居合わせないことや、話者が研究協力のために指定された場所に来るのではなく、普段と同じ状況の中で会話に臨めることなどの、利点がある。しかしデータ収集に先立つ研究の主旨説明及び同意願いも、話者に依頼することになるため、初対面の相手との会話を収集してくることは望めないだろう。初対面雑談会話が自然発生的に生じる場面は多いが、事前にインフォームドコンセントを得にくい点が、そのデータ収集を困難にしているといえる。

初対面雑談会話のデータ収集にも応用できることとして、Mondada (2012) はインフォームドコンセントを前提に、Observer's Paradox に以下のように対処可能だと述べている。

一つは自然発生的な行為を収集するための方法を洗練させること（話者にカメラやマイクが存在を忘れさせるよう、技術的、エスノグラフィー的に、倫理的にその方法をより適切にするなど）、もう一つは話者が録音録画機器を志向しているときに特定可能であることを認識すること（Mondada, 2012, p.34、著者訳）

「録音録画機器を志向しているときに特定可能」とはつまり、話者はデータ収集において、常にそのデータ収集の状況及び用いられている機器を志向しているわけではないということである。例えば話者がカメラを見るときや、データ収集の状況を意識して発話を行うこともあるだろう。しかしデータを分析すれば、多くの場合それらは特定可能であり、それらが当該課題の分析データとして適さないのであれば、その部分を除いて分析することもできるだろう。インフォームドコンセントを得る必要がある以上、研究者は Mondada (2012) の主張の通り、「方法を洗練」させながら、データの自然さを追求する必要がある。

本稿では次節で、著者が実践した交流会型収集の事例を、自然さを高める案の一つとして報告する。

4. 交流会型収集の事例報告

著者は2015年6月に、交流会型のデータ収集を実施した。本節ではその報告をした後で、残されている課題などについて述べることにする。著者は都内大学において、初対面雑談会話を収集すべく、学生同士の交流会を開催することとした。それは初対面雑談会話が生じる場面を考えた際、それが、研究者により実現可能なものの一つだったからである。そして「交流会で会ったことを想定して話して下さい」と指示するよりも、実際に交流会を開催しその様子を録音・録画することで、より自然なデータを収集できると考えた。以下、協力者の募集と当日の手続きについて順に説明する。

まず協力者を募集するために、大学構内に以下のポスターを掲示した。このとき著者は、日本人学生と中国人留学生との会話を収集することを目的としていたため、「中日交流パーティー」と交流会に名前を付けた。

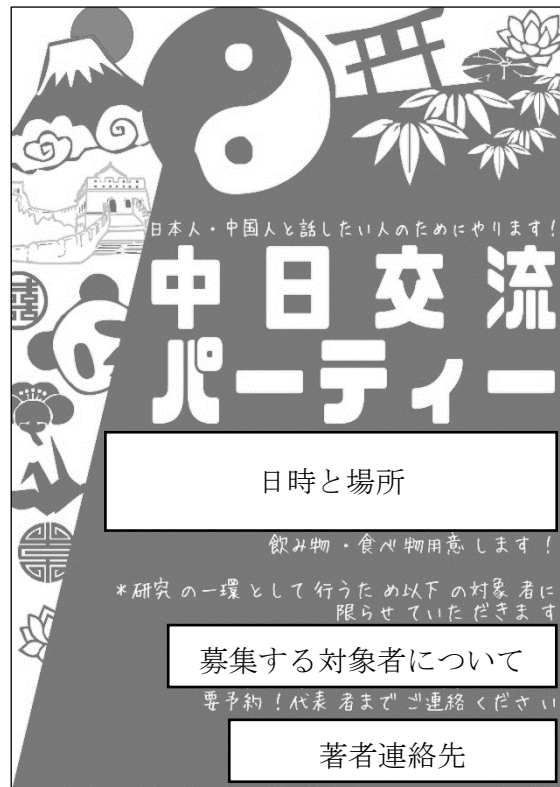


図 1. 協力者募集のためのポスター

協力者として連絡してくれた者には、研究の目的及び会の詳細をメールで連絡した。この段階で、当日はデータ収集のためにまず決められた席に座り、目の前の相手と話してもらうこと、そのあとは自由に誰と話してもいいこと、軽食と飲み物をこちらで用意することなどを伝えた。さらに収集したデータの使い方や個人情報の保護などについても、丁寧に説明した。その上で改めて協力を依頼することで、インフォームドコンセントに必要な十分な説明を行い、協力の自由を与えられたと考えている。協力を承諾してくれた者に対しては、研究協力への同意書を送付し、署名して当日持参してもらった。

当日は 20 名の協力者に大学の食堂に集ってもらい、まず署名済みの同意書を提出してもらった。スペースを十分に確保できる大学食堂に集ってもらったのは、20 名を収容するためと、ビデオカメラを話者から離れた場所に設置するためである。話者がビデオカメラの存在を気にしないよう、その視界から外すことが有効だと考えた。また 20 名集まったことも、録音・録画されているという状況に注意が向くことを防ぐことに、役立ったと考えている。同意書の提出後、協力者には軽食と飲み物を取らせ、著者が指示する席につかせた。そして目の前に座る相手と、会話をしてもらった。軽食と飲み物を用意したのは、交流会としての雰囲気を高めるためである。またテーブルに IC レコーダー以外のものを配置することで、IC レコーダーを目立たなくする狙いもあった。

以下に、当日のデータ収集の様子を図示する。

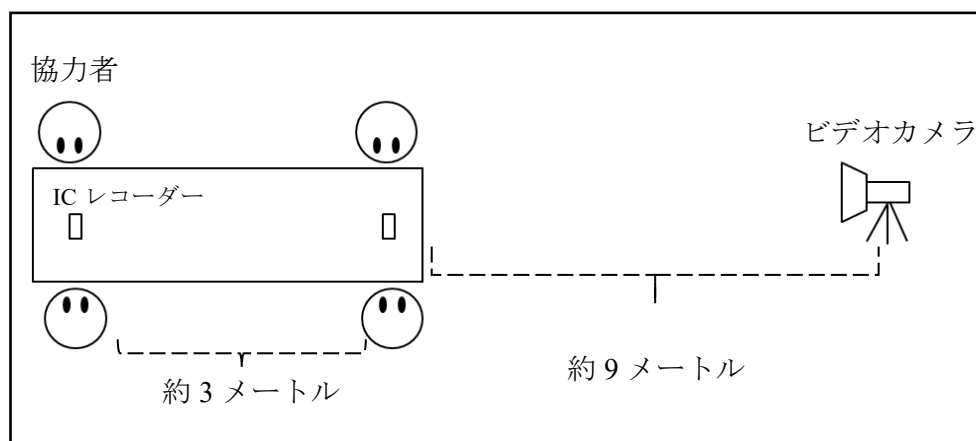


図2. 会話収集の様子（一つのテーブル）

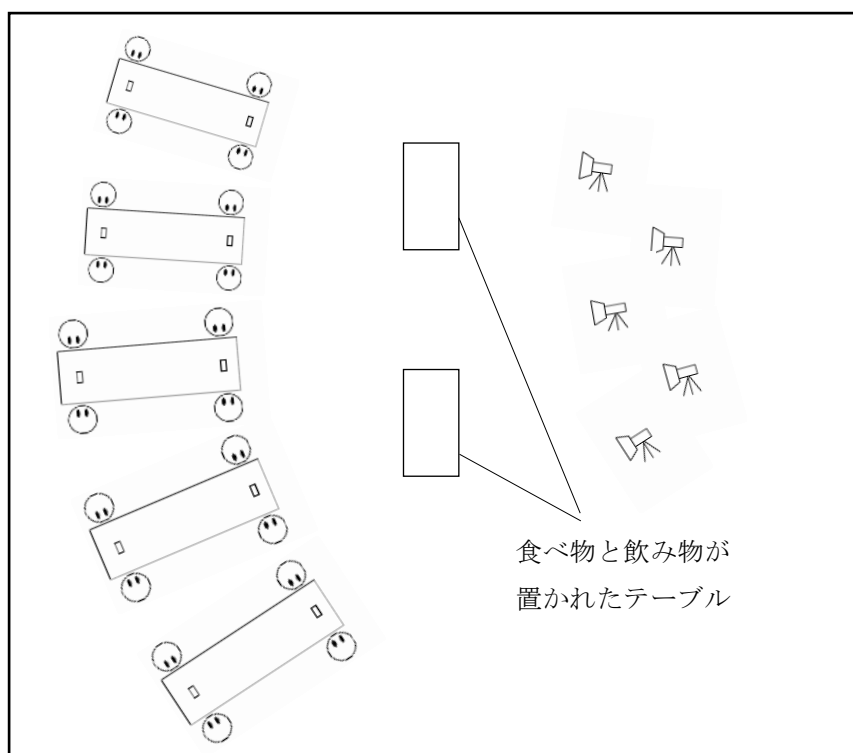


図3. 会話収集の様子（全体）

著者の研究では二者間の初対面雑談会話を収集する必要があったため、上記のような配置にしたが、研究目的によっては、話者を異なる配置にすることも可能である。結果として、実験室などで初対面の協力者を二人きりにするよりは、初対面雑談会話として自然なデータを収集することができたと考えている。場面を話者に想定させるのではなく実際に交流会という場面を作り上げたこと、インフォームドコンセントを徹底したこと、録音・録画が意識されにくいように工夫をしたことが、その特徴といえる。ただ上記のような手順でデータを収集するには、著者一人の手では十分ではなく、カメラの設定や話者の誘導、軽食と飲み物の設置をするために、二人の協力を要

した。人手がかかることは、この方法のデメリットといえるだろう。

データの分析では、データ収集という状況を話者が志向していると考えられる場面、いくつか確認することができた。それは例えば、話題として著者の研究内容について話す場面や、ビデオカメラに視線を送るといった行動が観察された場面である。話者の注意をいくら分散させようとも、データ収集していることを話者に知らせている以上、このような場面は常に生じうるだろう。ただ今回の事例では、それらの場面はいずれも短く、Mondada (2012) の主張の通りデータから除外しても、研究に支障はなかった。

最後に、本研究と同じく交流会型収集を用いている先行研究である、Edstrom (2004) の主張を紹介したい。Edstrom (2004) は初対面雑談会話でなく、友人同士の会話を収集しているが、その収集方法がデータの自然さに与える影響に言及している。まず Edstrom (2004) は、以下のようにその不自然さを認めている。

会話が収集された交流会 (gatherings) は自発的なものではなく、交流会は計画され、話者は事前に選定されていた。母語や性別などの研究変数をコントロールするために、誰を招いて誰と話させるのかも、(研究者により) 決められていた。さらに、参加者がデータの収録に関して同意することの必要性が、交流会の自然さをどうしても損う結果となったといえる。(Edstrom, 2004, p.1503、著者訳)

上記のように自然さが損なわれたことは、著者の事例でも同様である。ただ Edstrom (2004) は続けて、それが会議室でのデータ収集でなく交流会型であることで、以下のような利点があったことを主張している。

話題や議題、タスクは参加者に与えられず、参加者はどのようなことをどれだけ話してもよかった。会話の長さや食べ物による注意のひきつけ、交流会の参加人数や邪魔にならない収録機器の配置などの全てが、会話を収録されていることに关するごちなさを、最小限にするのに役立った。(Edstrom, 2004, p.1504 著者訳)

著者の事例でも、上記 Edstrom (2004) の主張と同様のことがいえる。ただその自然さについては今後様々な工夫をもって改善されていくべきであり、どのような方法が可能であるのか、今後も探究を続ける必要がある。また研究テーマとしては、実験室で行われた会話と交流会で収集された会話の比較も、価値があるだろう。今後の課題としたい。

注

1 ただ雑談の中で、誘いや依頼、断りなど「特定の達成すべき課題」を話者が志向することは頻繁にあるので、厳密に雑談とそれ以外を切り離すことは難しいといえる。

2 力と心的距離の二つは、Brown & Levinson (1987) によるポライトネス理論でも、フェイス侵害度を見積もるための公式に含まれている。つまり特定の行為が相手のフェイスを侵害する程度に、話者間の力関係と心的距離が大きく影響すると、考えられている。日本語教育研究には、ポライトネス理論を理論的枠組みとしている研究も多くあり、それらのデータ収集で話者間の力と心的距離が統制されているのは、理論の影響もあると考えられる。

3 自然なデータとそうでないデータの区別については、*Discourse Studies* 上に掲載された Speer (2002) ら会話分析者 (Conversation Analysts) による、natural data と contrived data、naturally occurring data と researcher provoked data などの用語を用いた議論が有名である。

4 西郡 (2002) も「偶然の初対面」のデータ収集方法の危険性を、以下のように認めている。

「偶然の初対面」のデータ収集はプライバシー侵害と紙一重のものであり、実験終了後、被験者にことの次第を詫び、研究目的での会話データの利用を許諾するかを聞く。これまで 20 組以上実験を行ってきたが、幸いなことに全員が許可してくれた。これは初対面の人との会話で差し障りのない内容であったことが主因であろうが、実験者が教員で被験者が学生であるという力関係が背景にあるかもしれない。(西郡, 2002, p.4)

参考文献

- Brown, P. & Levinson, S. (1987). *Politeness: some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Drew, P. & Heritage, J. (ed.) (1992). *Talk at Work*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Edstrom, A. (2004). Expressions of disagreement by Venezuelans in conversation: reconsidering the influence of culture. *Journal of Pragmatics* 36, 1499-1518.
- Fan, S. K. (1992). *Language management in contact situations between Japanese and Chinese*, Unpublished Ph.D. Dissertation, Department of Japanese Studies, Monash University Australia.
- Labov, W. (1972). *Sociolinguistic Patterns*. Pennsylvania: University of Pennsylvania Press.
- Mondada, L. (2012). The conversation analytic approach to data collection. In J Sidnell and T Stivers (Eds.), *The Handbook of Conversation Analysis* (pp.32-56). Oxford: Wiley-Blackwell.
- Neuman, W. L. (1997). *Social research methods: Qualitative and quantitative approaches* (3rd ed.). Massachusetts: Allyn & Bacon.
- Neustupný, J. V. (1985) Problems in Australian-Japanese Contact Situations. In J. Pride (ed.), *Cross-Cultural Encounters: Communication and Mis-communication* (pp.44-64). Melbourne: River Sene Publications.

- Speer, S. A. (2002). 'Natural' and 'contrived' data: a sustainable distinction?. *Discourse Studies* 4(4), 511-525.
- Warren, M. (2006). *Features of Naturalness in Conversation*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- 伊集院郁子 (2004). 「母語話者による場面に応じたスピーチスタイルの使い分け 母語場面と接触場面の相違」. 『社会言語科学』 6:2, 12-26.
- 猪俣公克 (2001). 「日本語母語話者のスピーチレベルは、学習者に対してどのように変容するか—日本人学生とタイ人留学生の会話分析から—」. 『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』 1, 51-66.
- 宇佐美まゆみ・李恩美 (2003). 「初対面二者間会話における「丁寧度を示すマーカのない発話」の日韓対照研究」. 『韓国語日文学会 2003 年度国際学術発表大会・夏季学術発表大会発表論文集』 99-106.
- 大場美和子・中井陽子・寅丸真澄 (2014). 「会話データ分析を行う研究論文の年代別動向の調査—学会誌『日本語教育』の分析から—」. 『日本語教育』 159, 46-60.
- 小川一美・吉田俊和 (2009). 「ダイナミックな対人関係」大坊郁夫・永瀬治郎(編)『講座社会言語科学 3 関係とコミュニケーション』 120-140. 東京：ひつじ書房.
- 串田秀也 (2010). 「サックスと会話分析の展開」串田秀也・好井裕明(編)『エスノメソドロジーを学ぶ人のために』 205-224. 京都：世界思想社.
- 嶋原耕一 (2014). 「母語場面及び接触場面の同等初対面会話におけるアップシフトについて」. 『社会言語科学』 16:2, 66-74.
- 関崎博紀 (2016). 「接触場面初対面会話における話題スキーマ：日本の大学における留学生と日本人学生の会話からの示唆」. 『筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育論集』 31, 17-32.
- 全鍾美 (2010). 「初対面の相手に対する自己開示の日韓対照研究—内容の分類から見る自己開示の特徴—」. 『社会言語科学』 13:1, 123-135.
- 田中弥生・柏野和佳子・角田ゆかり・伝康晴・小磯花絵 (2017). 「『日本語日常会話コーパス』構築における会話収録方法」『言語処理学会 第 23 回年次大会 発表論文集』 481-484.
- 丹羽牧代 (2007). 「言語は社会行為としてどう働くか—制度的場面の言語分析フィールドワーク」. 『南山短期大学紀要』 35, 71-87.
- 陳文敏 (2003). 「同年代の初対面同士による会話に見られる「ダ体発話」へのシフト—生起しやすい状況とその頻度をめぐって—」. 『日本語科学』 14:10, 7-28.
- 筒井佐代 (2012). 『雑談の構造分析』 東京：くろしお出版.
- 西郡仁朗 (2002). 「自然会話データ「偶然の初対面」の公開—その方法論について」. 『人文学報』 330, 1-18.
- 橋本拓郎 (2006). 「日本人学生の初対面会話におけるスピーチレベルの機能：中間的な

スピーチレベルの分析を基に」．『言語と文明』4, 77-102.

李珂南 (2014). 「日中大学生接触場面の初対面会話における話題転換—『ラポールマネジメント』の視点から—」．『日本語教育』157, 17-31.